

地域美術館との連携によるワークショッププログラム構築に向けた実践的研究 ー福山市立大学教育学部とふくやま美術館の連携活動を手がかりとしてー

研究代表者 福山市立大学教育学部 渋谷 清
研究協力者 ふくやま美術館 筒井 彩
ふくやま美術館 田窪 薫

1. 背景

美術館は、美術作品の展示会場として機能する以外にも、社会教育施設としての多面的な機能を有している。展示会の開催のみならず、より多くの人々が広く美術に親しみや関心を持ち、その機能を十分に活用してもらうよう、様々な教育普及活動を行っている。都道府県や市区町村が運営する各地域の美術館では、特にこの教育普及活動に力を入れている館が近年増加しており、その主な教育普及活動のひとつに観覧者自身が参加する「ワークショップ」がある。

報告者は、これまでにふくやま美術館での4つの特別展における関連ワークショップの企画・実施に携わってきた。小学生を参加対象者に「子ども造形教室」と位置づけ、ゼミ生中心に本学学生の協力を得ながら実践を重ねてきた。臨機応変な学生への呼びかけのためか、参加者はこれまで少数に留まるが、協力学生からは“子どもたちとのワークショップ活動から多くの学びがあった”“実際に参加体験できて良かった”などの声が聞かれ、その教育的効果を実感する。一方、ふくやま美術館側としても、このワークショップには若年層の来場者、とりわけ子ども(就学前も含む児童・生徒)とその保護者に対しては、将来的な再来館も見越してさらなる増員に期待しているところである。

2. 目的と方法

本研究では、まず地域美術館と大学教育が連携したワークショッププログラムの先行事例における現状と課題を踏まえつつ、2025年度にふくやま美術館より実施協力依頼を受けた2つのワークショップを対象に、参加観察・企画・試行・実施への反映を試みた。この2つの実践研究の活動機会から、大学と美術館双方にとって効果的なワークショッププログラムの構築に向け、有効な連携の具体的方策を探るとともに、発展的な課題を抽出することも本研究の目的とした。

3. 実践結果と考察

- ① 特別展『アートとあそぼう ブルーノ・ムナーリ展』 会期：7月21日～9月15日の関連ワークショップとして小学生以上を対象に、会期中の火曜から金曜の10:00～15:00に随時造形ワークショップが実施され実践協力と参加観察を行った。
- ② 特別展『生誕140年 藤田嗣治 7つの情熱』 会期：2026年1月24日～3月29日の関連ワークショップとして小学生以上を対象に、「フジタ画伯に挑戦！」のテーマでワークショップの講座内容企画および講師を担当した(2026年2月28日実施)。

本学教育学部とふくやま美術館の連携活動①②をもとに、ワークショッププログラムにおける連携活動を進める大学側と美術館側の双方向から検討した結果、有効な連携のポイントとして次の3点の具体的方策が見出された。■可能な限り事前に情報共有を進める(大学・美術館) ■学生にとってセカンドスクールとなるような仕組み(大学) ■対面的交流の準備機会(大学・美術館)

また発展的な課題としては、次の2点が上げられた。■担当者変更時でも持続可能な連携体制づくり(大学・美術館) ■予算組みにおける教育普及活動の位置づけ(美術館)